

「カーン、カーン」と半鐘がなる。二十八日午前三時頃、母が、
「Mや早くNたちを連れて、新屋へ逃げな。」

と言つて、雨靴をさがしだしてくれた。履物はあちこちに散らばっていて、水はもう家の中へ入りそうだ。私も手伝つて荷物を上げなくてもいいだろうかと思つたが、

「あぶないで早くきな。」

と叫ぶ母の声が水音にまじつてとぎれとぎれに聞こえる。私たちを心配させないやうにと母の気持なのだろう。表へ出たらもうひざの所まで水がついて来ている。父や母は水の増し具合、雨の降る量などを、疲れている中でみているのでしよう。

あまぐつをぬいで三人一つの傘で新屋までいった。

「おばさん、水がついて来て逃げてきたで、おらして。」といつたら、

「さあさあ、早くこれで足をふいてあがつておいな。」

といつて、ぼろ布を出してくれた。

あがつてしばらく雨の音を聞いていたが、こんな時にあつたかい言葉を一つかけてくれるだけでも、人の情というものが、本当にうれしかった。おばさんが、

「ねといな。」

と言つて布団を敷いてくれたので、妹たちは敷いてくれた布団へ、私はAちゃんとならんでねた。Aちゃんは去年の十月生れた赤ん坊だ。とても可愛い子だ。Aちゃんの寝顔をみていたら、なにもなやみや悲しみはなく、幸福そうな顔で寝ている。いいなあAちゃんは、と思つた。おばあちやもきた。

「うちももうだめだ。流れてしまふ。」とため息をつく。

息を吸えばため息ばかり出る。私もなんだかさみしくなつた。家の中を本流が流れているのだ。そして豚が五匹ばかりたすかつただけで、あとはみんな流れてしまったと言つた。私は家がどうなつたのか、おかあちや達は死にやせんかと心配でたまらなかつた。

朝になりだいぶ人の声がするようになった。大勢の人が、

「初瀬屋があぶない。」といつてさわいでいる。

ザアザアザアと音をたてて、竹をかついで走る人もいる。たわら、かますなどをついで歩いていく。私は障子の穴からそれをみていた。家の少し下の方は、屋根だけ出ている家が六軒もあった。白っぽく濁つた水で湖水みたいだ。おばさんの話だと、B組のNさんの家は屋根まで水がついて、

「助けて下さい。S・ー」

と旗に書いて立てていて、警察のボートにきてもらつて逃げたそうだ。Fさんの方は家がつぶれたとのうわさだが、どうしているだろうか。友達の事が急に心配になつてきた。皆んな無事だといひんだけ。

あの大水は悪魔だ。人を苦しめる悪魔だと思つと、こんな人の苦しみをなく

すには、高い屋根まである様な堤防を作らなければ、そして、家のない人たち、あつても住めない人に家を建ててもらいたいと思った。キャラメル箱が落ちていけば、中身があるかどうかと合意をするという。私はこんな所まで人間をつきおとした悪魔がにくらしくてたまらない。

これから庭の泥出しだが、耕うん機もオートバイも自転車も泥に埋っていた。泥と水と汗と悪臭の中で、みんなが力の限り働いた。しかし、雨足は激しく降り続ける。夕やみの中に天竜川、久米川はゴーゴーともものすごい音をたてて流木や石が流れ、大きくうねっていて、水は更に増しそうだ。母に言われ花御所へ行ったら、おばさんが、

「早くぬいでお風呂に入りな。」と言ったので入った。

でてから牛乳をしぼるのを見ていたら、

「助けてえ、助けてえ。」

と女の人の声が家の方でするので、母じゃあないかと心配でならなかった。

「そんなに心配なら、おばさんが手伝に行つてやるは。」といったので、

「おねがいます。」と言った。Tちゃんが、

「僕がいくもの。」といったら、

「Tちゃんはみんなといっしょに家においな。」と行って出ていった。

不安と恐怖の一夜はあけた。皆無事であった。家へ行ったら畳の上を水が通っていた。家の横、はなれの方、お蔵の方から水がどんどん入っていた。畳を洗つては二階へ二十七枚上げました。後は上げられなかったので、外へつんでおいた。

あれから約二ヶ月たちました。一日一日と復旧工事は進んでいる様ですが、家の方は少し雨がふると安心して眠れません。ご飯もおいしくありません。

みんなが安らかに眠れる夜にして下さい。

(三十六年)